桂影舎露葉編『かゞみ餅』

伊藤善隆

はじめに

本稿は、桂影舎露葉編『かゞみ餅』（文政三年刊、個人蔵）を翻刻・紹介するものである。

露葉は、大坂の美濃派俳人である。三浦若海『俳諧人物便覧』（加藤定彦編『俳諧人物便覧』ゆまに書房、平成11年6月）に「露葉　桂影舎　楚石坊門　大坂人」、『大阪名家著述目録』（大阪府立図書館、大正3年3月）に「桂影舎　大阪の人、楚石坊の門下」、平林鳳二、大西一外『新選俳諧年表』（書画珍本雑誌社、大正12年12月）に、「◇露葉、桂影舎と号す、楚石坊門、大阪人」とあるとおり、東武獅子門の楚石坊の門人である。また、後述するように、享和から文化・文政期にかけての活動が確認できる。

ただし、これまでの研究で、露葉が注目される機会は、ほとんどなかったようだ。たとえば、『俳諧大辞典』（明治書院、昭和37年7月）、『俳文学大辞典』（角川書店、平成7年10月）にも、露葉は立項されていない。また、『岐阜大学教育学部　郷土資料（2）美濃派俳書序跋集』（岐阜大学教育学部、昭和46年3月）、鈴木勝忠「『美濃派俳書序跋集』追加」（『東海近世』第九号、東海近世文学会、平成10年4月）に露葉の編集した俳書の序跋は収録されていない。

すなわち、これまでの東武獅子門の研究では、鈴木勝忠「東武獅子門の展開―墨直しをめぐって―」（『国語と国文学』至文堂、昭和34年1月、のち『近世俳諧史の基層』名古屋大学出版会、平成4年12月に収録）をはじめ、兼子順「東武獅子門白山下連の形成と展開―東武吉見新井家所蔵「歳旦」を中心にして―」（『文書館紀要』第29号、埼玉県立文書館、平成28年3月）など、主に玄武坊以前の事象が問題とされており、楚石坊の時代が注目されること自体があまりなかったと言っ

てよい。そのため、露葉が注目されることもなかったのである。そこで、まずはその俳諧活動の概略を確認してみたい。

なお、『新選俳諧年表』には「文化四年　丁卯　▼左栗歿、八月廿五日、蔦雨園と号す、露葉の弟、楚石坊門、大阪人」とあり、兄弟で楚石坊に師事したことが知られる。また、他に露葉と号した俳人には、元禄期に活動した水間沾徳や、大名俳人の諏訪忠晴、また嘉永期に活動した奥州吉岡宿の吉田善吉など、複数が確認できる。上記の俳人たちは、俳系はもちろん、活動時期も異なるが、大坂の露葉と同時期、しかも同じく楚石坊系の俳書に入集する駿河の「女　露葉」がいる、両者が同じ俳書に入集することもあるため、注意を要する。

露葉の俳諧活動

限られた調査の範囲ではあるが、確認し得た露葉の入集状況と入集句を列挙し、露葉の俳諧活動の概略を確認したい（露葉の編著については、次節で触れる）。以下、書名に注記した刊年は、主に序跋の年記に従ったものである。また、『墨なをし』には、二年分を一冊として刊行したものがあるが、便宜的に刊年として二年分を併記した（すなわち、文化十年と十一年の会式を一冊として刊行したものは文化十一年の刊行と推定されるが、以下では便宜的に「文化十・十一年刊」と記した）。なお、新潟大学附属図書館佐野文庫蔵本と弘前市立弘前図書館蔵本は、国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」によって参照した。また、所蔵者の注記の無いものは、個人蔵本を参照した。

全（摂津）大坂　露葉

あら海や千鳥の声の浮しづみ

（『墨なをし』寛政十一年刊）

※早稲田大学図書館雲英文庫蔵本による。

摂津大坂　露葉

雉子啼やかへ馬たてる小藪陰

（『墨なをし』寛政十二年刊）

大坂　露葉

硯にも花の雫や手向の日

大坂　露葉

五月雨や寐所かえる子持犬

（『墨なをし』享和二年刊）

摂津大坂　露葉

しばらくは狂ふや瀧にちる紅葉

（富春館桃仙編『さつきの夢』享和二年刊）

楚石師坊へ便りして玄武尊師七回忌の牌前へさゝげ奉る

大坂　露葉

爰からもあふぐ夕べや梅の月

（玄二坊編『おぼろ影』享和四年刊）

※玄武坊七回忌追善集。

大坂　露葉

道ふさぐ牛こはがるや野丶遊び

（麦里編『越のむかし』享和四年刊）

大坂　露葉

ふさがれた空にあせるや猫の恋

（『墨なをし』文化元年刊）

※新潟大学附属図書館佐野文庫蔵本による。

梢まで斧のひゞきや露しぐれ　大坂露葉
（『乙丑墨なをし』文化二年刊）

行く鳫や越の道者の出るころ　大坂連露葉
（『丙寅墨なをし』文化三年刊）

まだ残る寒さやそこに炭俵　大坂連露葉
（『丁卯墨なをし』文化四年刊）

つと入や帷子とふす娵の汗　摂津大坂露葉
（相模藤野連中編『明の月』文化四年刊）

から鮭や鰹は花の名もあるに　大坂露葉
（『戊辰墨なをし』文化五年刊）

※弘前市立弘前図書館蔵本による。

新しい橋の匂ひや朧月　大坂露葉
（『己巳墨なをし』文化六年刊）

駕舁は先へ待せて花野かな　大坂露葉
（『庚午墨なをし』文化七年刊）

草で足ふいた跡あり根芹つみ　大坂露葉
（『〔そのまさご〕』文化八年刊）

庖丁も香に憎るゝ根深かな　大坂露葉
（『壬申墨なをし』文化九年刊）

※「三月十六日　於臨川寺興行」の「百韻」にも一座。

釈迦よりも先へ涅槃の便かな　大坂露葉
（桂後選『去て後』文化九年刊）

炭竈やそこへ落葉も来て煙り　大坂露葉
（『己酉甲戌墨なをし』文化十・十一年刊）

敷ものにして子の遊ぶはせを哉　大坂露葉
（『乙亥丙子墨なをし』文化十二・十三年刊）

駕舁の肩で息する暑さかな　大坂露葉
庖丁も香に憎るゝ根深かな　露葉
俎板に薄刃のあとやほし大根　露葉
蝶〳〵や庭へもひとつ野のあまり　仝
筆すての名は松にありつく〴〵し　仝
鮒すくふ網にはね出す田にしかな　仝
降出して唄の腰折る茶つみ哉　露葉
紅つみや手にはかの行く朝曇　仝
広い門せまく通すや麦の秋　仝
降さふで降かねる日の暑さかな　露葉
稲妻や折れ込みてからたてる窓　露葉
順礼の笠もいで行野分かな　露葉
うら枯て目だつや藪に万年青（オモト）の実　仝
留主番の気まゝに奢る火燵哉　露葉
（『戊寅そのまさご』文政元年刊）

※国会図書館蔵本による。

船の朝干して結はるゝ柳かな　大坂露葉

（蝶二選『鹿野山集』文政二年刊）

木犀や庭のしまりも香にうごき　大坂露葉

（楚石坊編『影七尺』文政三年刊）

※玄武坊二十三回忌追善集。

不義ものと書く腰元や猫の恋　大坂露葉

暮てから日和ほめるや星月夜　露葉

筏にも秋の模様やちる紅葉　仝

灰汁桶のしたゝる音やおぼろ月　露葉

長閑さや鳥の羽風に散るさくら　露葉

木瓜咲や鼻のもげたる石地蔵　露葉

夕貝や月も半分ひらく暮れ　露葉

濡れて出る鳥もありけり露時雨　露葉

野ゝ寂や案山子も弓の手を放し　露葉

せゝなぎの流を飛ぶやみそさゞゐ　露葉

鍋にさへわけへだてあり薬くひ　露葉

（『庚辰そのまさご』文政三年刊）

庖丁も香に憎るゝ根深かな　大坂露葉

（巴山・下住編『重すゞり』文政三年刊）

薄から先へ渡るやはつあらし　大坂露葉

（『辛巳壬午墨なをし』文政四・五年刊）

雪の日やこたつへふへる足の数　大坂露葉

（『癸未甲申墨なをし』文政六・七年刊）

つら〳〵往事をかえり見れば、二十四年の捧頭も
今は片時の夢とさめて、その遺教の胸にみちて、
その俤の芽にうかむ。先師の牌前に合掌して

月雪に影仰ぐ恩つもる恩　露葉

（『その石すゑ　中』文政七年刊）

※発句の他、歌仙一折（「楚石庵追善」）の脇句を詠む。

残る蚊や昼もはなれぬ明き徳利　大坂露葉

（『その石すゑ　終』文政七年刊）

※楚石坊三回忌追善集。

蔦も手のとゞかぬ壁や蝸牛　大坂露葉

（曙庵文明・泉響園琴而編『めぐるあき』文政九年刊）

其罪も昼はほどけて鵜縄かな　大坂露葉

（い山坊編『此はしら立』文政十一年刊）

※楚石坊七回忌追善集。

以上、当該時期の俳書を網羅的に確認し得たわけではなく、あくまで限定的な調査結果ではあるが、それでも露葉と楚石坊との関係の深さをうかがい知ることができる。すなわち、露葉の入集が確認できた

俳書はいずれも楚石坊の編著、あるいは楚石坊の門人の編集になる俳書である。また、玄武坊七回忌追善集『おぼろ影』に句を寄せる際の前書に「楚石師坊へ便りして」とあったり、玄武坊在世中の『墨なをし』（寛政九年刊、早稲田大学図書館雲英文庫蔵本を参照）に入集がなかったりすることも、先に引用した諸文献に記されたとおり、露葉が楚石坊門の俳人であったことを裏付ける。

なお、露葉の楚石坊への入門は、『その石すゑ』に載る追悼句に「二十四年の棒頭も今は片時の夢とさめて」とあるのによれば、文政五年（楚石坊の没年）を遡ること二十四年、すなわち寛政十一年となろうか。寛政十一年は、楚石坊の師である玄武坊が没した翌年である。

露葉の編著

露葉には複数の編著がある。すなわち、『俳諧人物便覧』は「著　葛之遊　心之杖」、『大阪名家著述目録』は「俳諧葛の遊　一」「俳諧心の枝　一」を挙げる。また、『新選俳諧年表』には、文化十一年の条に『八千代の春』、文化十四年の条に『富士詣』、文政元年の条に『葛濃阿楚飛』（後掲のように、正しくは文化元年刊）、文政二年の条に『蔦の雨』の三点を検索することができる。

また、国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」（以下、「古典籍ＤＢ」と略記）は、以下の六点を露葉の編著として収録する（令和3年10月23日確認。なお、※印を付し、私に注記を加えた）。

『葛濃阿楚飛』（文化元年刊）※露葉が東下して、はじめて江戸の楚石坊を訪ねた折の記念集。

『こゝろの杖』（文化八年刊）※「古典籍ＤＢ」に刊年不載、序文の年記による。露葉が「初老」を迎えた記念集。

『八千代の春』（文化十一年刊）※露葉の父が「耆老」（八十歳）を迎えた記念集。

『富士詣』（文化十四年刊）※露葉の富士登山、江戸下向記念集。

『蔦のあめ』（文政二年刊）※蔦雨園左栗（露葉の弟）の寂照忌（十三回忌）追善集。

『俳諧心の枝』※「古典籍ＤＢ」に「大阪名家著述目録による」。

以上のうち、『俳諧心の枝』は、おそらく『こゝろの杖』の誤伝であろう。とすれば、これまで知られていた露葉の編著は五点である。したがって、本稿で紹介する『かゞみ餅』（文政三年刊）は、これまで所在の知られなかった俳書である。

まとめ

『かゞみ餅』巻頭句の前書によれば、同書は露葉「知命の春」の刊行、すなわち五十歳の記念の集である。小冊ではあるものの、露葉の伝記的事跡、また大坂における東武獅子門の活動をうかがい知るために貴重な撰集であると言えよう。ここに翻刻紹介する所以である。

〈書誌〉

書型……半紙本一冊。二二、七cm×一五、八cm。袋綴じ。楮紙。

表紙……薄縹色布目原表紙。

題簽……原題簽。中央無辺。「加〻美餅　大坂露葉」。

版式……無辺無界毎半葉八行。

字高……一五、七cm（初丁掲載の露葉発句「日と月の〜露葉」を計測）。

奥書……「文政庚辰のとし」（文政三年）。

刊記……ナシ。

柱刻……「鏡　一（〜七）」。

丁数……全七丁。

〈凡例〉

翻刻にあたり、句読点、濁点を適宜補い、改行も適宜改めた。なお、「三」丁表七行目「牙（キバ）」の「バ」の濁点のみ、原本のママである。

虫損による難読箇所は□（虫損）と示した。

異体字等は概ね通行の字体に改めたが、一部原本の表記を残した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに　」をつけ、（　）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

参考のため、原本の図版を末尾に示した。

〈翻刻〉

加〻美餅　大坂露葉」（上巻表紙・原題簽）

（白紙）」（上巻表紙見返し）

歳祝　浪華

ことしは知命の春を迎るより、まづ恵方に向ひて、その春光を仰ぐ

月と日の恩や　桂影舎

かさねてかゞみ餅　露葉」（「二」オ）

哥仙行

桂影主人、ことしは知命の春を迎て、その賀莚をひらかるゝ席につらなりて、なを幾十がへりもと、永くひさしからむ事をことぶく

祝ふその栄えや年も松の花　千遊

春を麓の遊び永キ日　露葉

蚊針にもかゝらぬ内の鮎汲て　楚流」（「二」ウ）

夜雨奇麗に晴わたりけり　一湖
市の店算盤持てかしこまり　枕流
急がぬ用は耳にき、捨　依正
精霊（ウ）の影は見えねど盆の月　巴遊
手作の畑の瓜に鉈豆　蕉居
帯解くて寐る世の秋の有がたさ　可雪
軍□（虫損）聞〳〵更すお日待　八重
垣ひとへ近い隣の鶏の声　ゑい
山家でもない山科の里　世幽
斎（キ）坊も鼻はぢかる、芥子和へ　浅之
団扇に笑ふ顔かくす娘　天鷺
行燈もあちら向れば風があて　東明
川まで汐のさして来る河岸　雀蛤
花よりも実のある叔父の状便り　葉
傍輩同士の新参こそぐる　遊
」（ウ一二）
白酒（ニヲ）も四日は雛のすべりなり　湖
夕日のいろを奪ふ毛せん　流
大名のお側に土もふまぬ狆　正
老の咄に出る三世相　枕
もの静雪にもならで小夜時雨　居
願きく杉に注連も淋しき　巴

しら歯にもあんな恨（ミ）は恋の牙（キバ）　重
名□（虫損）今とても木辻鳴川　雪
」（オ一三）
おそ早も酒手次第の駕籠なれば　幽
若いこゝろの耳へ貸す智恵　い
これ〳〵と起すも月に高鼾　鷺
さめぬ暑さの夏は過ても　之
いまにまだ百日紅（ニウ）の咲残り　蛤
誰が落書を庵の留主の戸　明
うなづいて居るのは謎も解たやら　遊
まづ俎板に豆腐一挺　葉
」（ウ一三）
うつろはぬ色こそよけれ花の主　正
菊の根分に千代のためしも　明

賀章　各前書略　大坂連中

たのもしき春や世に名を揚雲雀　一湖
囀るも花をかざしや五十雀　巴遊
世にひらく花やことしの春はなを　枕流
」（オ四）
今を世に時めく春やはつざくら　依正（僧）
まだ冴る月を眼鏡や五十の春　蕉居
梅が香やそれから広く名もかほり　可雪（女）

祝ふ日の影なを永し糸ざくら　仝　八重
握る手に指は起さぬ蕨かな　幼女　ゑい
月花を杖に遊びの春永し　尼　世幽
祝ふ名も八千代の春や玉椿　女　浅之
道にその遊びは永し紙鳶の糸　東明
末永き秋を青むや苗代田　天鷺
老木とは見えぬ若芽の梢かな　雀蛤
三千とせの莟たのもし桃の花　楚流

」（四ウ）

名録

ことし此春、東都墨直しへ出席せし折から、人〳〵へ短冊を乞しが、その句〳〵を爰に出して、此小冊の飾となす事、左のごとし

東都連

籠で汲む井戸もありけり真桑瓜　百花坊
春夏の曇りやはれて秋の月　松寿坊

」（五オ）

寒菊にきほひまけずや石蕗の花　有橋
すき腹にこたへて寒し啼く千鳥　以山
朝風のちぎる〻音やわたり鳥　蘇慶
鬼ならで柊に消えつ寒念仏　雨江
貧僧の米櫃にするふくべかな　不釈

青すだれかけて掃けり椽の塵　巴山
子の慾の八ッ口潜る木の実哉　下住
鈴虫や鈴に緒のなき神の庭　葛路
ひぐらしや松の裾から夕日影　兎江
埋火や寐酒と明けを入かはり　貞固
更るのは油に知るや年の市　峨竹
百合の花雨も逆さにあたりけり　等宇
蜩や味噌する音のひゞくころ　其又
苗代や針の先ほど秋の芽も　三省
雪解や箒にかゝる水の泡　芦遊
足あとに水濁りけりかきつばた　牛歩

」（六オ）

川狩りや川に褌の洗たくも　元沢
ない足の跡をつけたる田にしかな　山許
鴉より先え蓮見の案内かな　鳩笑
下萌や残りし雪の間から　里旭
年毎に鎰もふへけり蔵びらき　麟車
定まつた妻とてはなし猫の恋　其柳
うぐひすや眠い蛙とうらおもて　桃奴坊
剃る内をやつとこらへる頭巾哉　浦和　文呂坊

」（六ウ）

枯れた名は隠れて雪の柳かな　仝　清夫
よい行義子に教えるや紙雛　大間木　其滴

水汲んで男呼びけり雪の朝　仝　化朝
筋骨のうごくや風の枯柳　五日市　松二
麦秋や暮てさへ野丶渡し船　仝　指月
紅つみや手にはかの行く朝曇り　露葉

」（オ「七」）

亀ノ賛　和詩七言

楚石老師

松の千とせと鶴の千とせと
ふたつならべて数合すとも
永く久しきためしなるには
此うへのなき亀のよろづ代

此詩は予が知命の春を迎たるを寿き給はんとて自画に此賛して恵みたまはりしを、爰に跋装とはなしぬ。

文政庚辰のとし

」（ウ「七」）

（白紙）

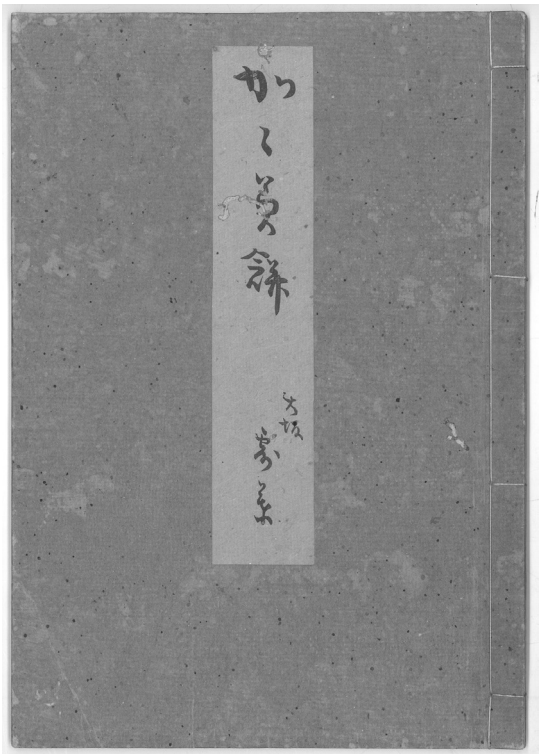
」（上巻裏表紙見返し）

」（上巻裏表紙）

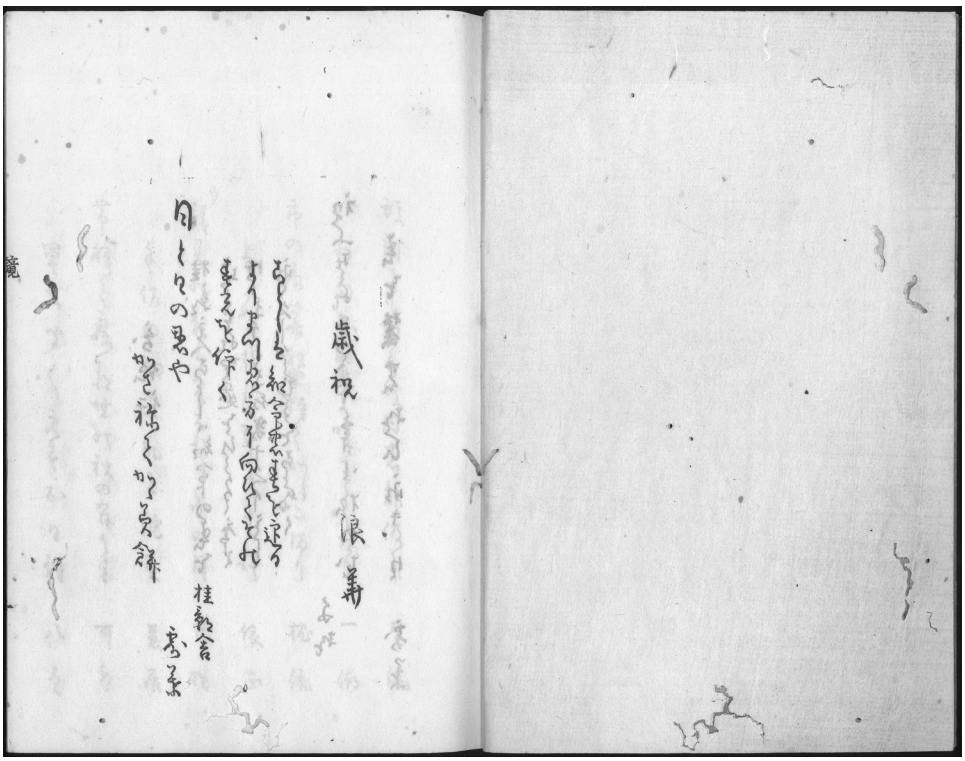
〈付記〉
本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C））「化政期俳諧再評価のための新研究」（研究課題番号 18K00296 代表・伊藤善隆）の研究成果の一部である。

〈参考図版〉

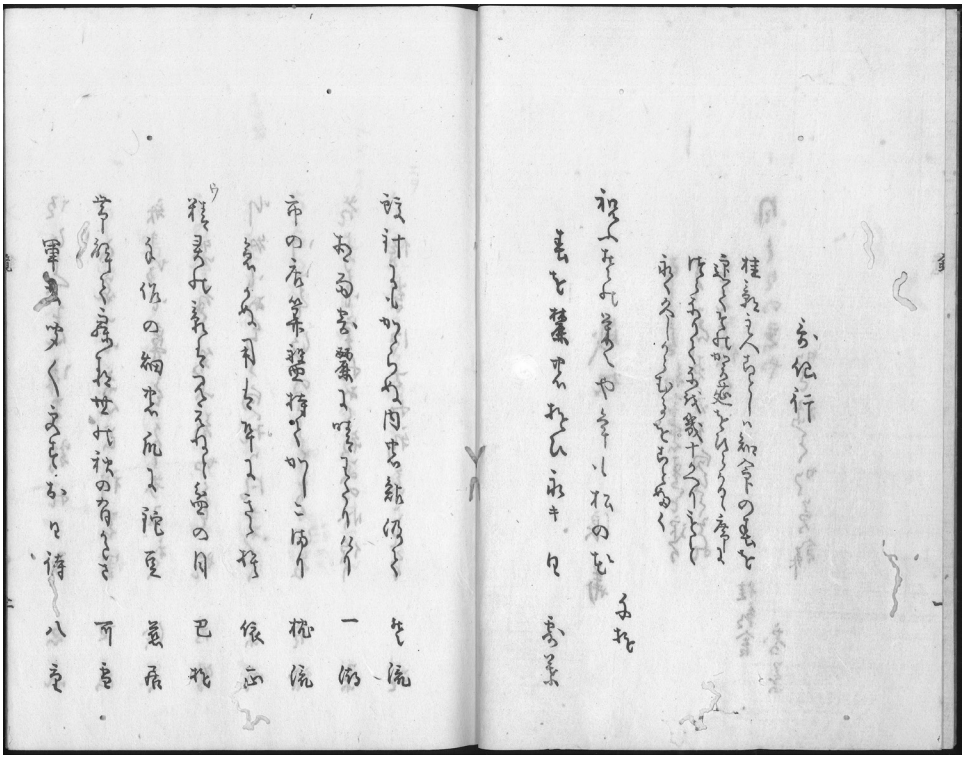
1．上巻表紙



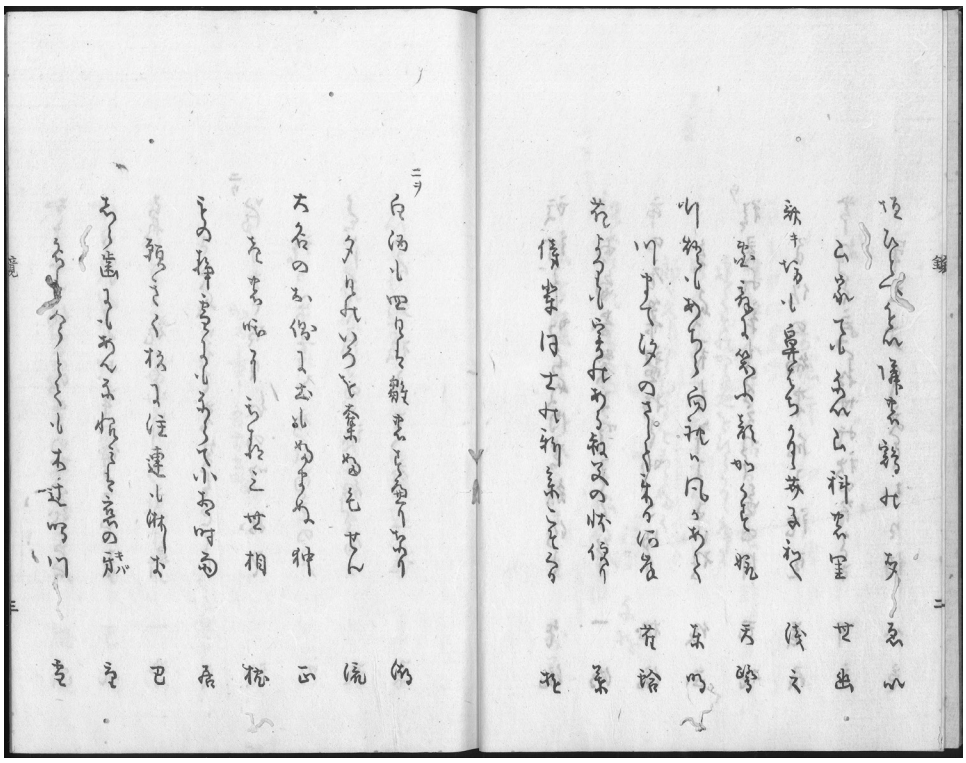
2. 見返し・「一」オ



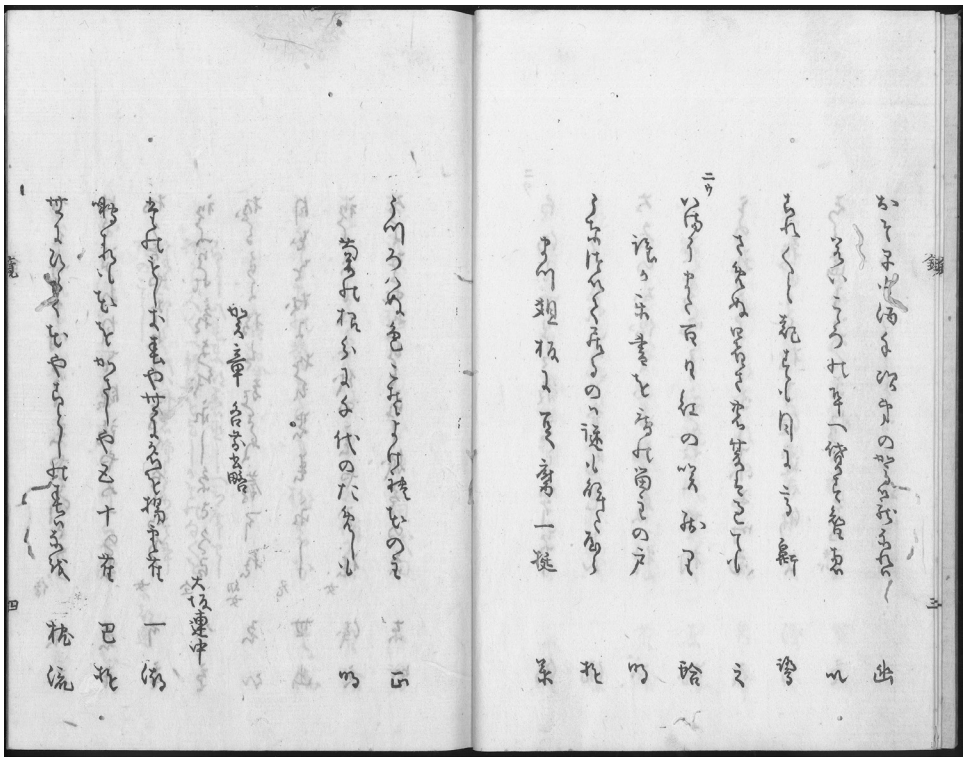
3. 「一」ウ・「二」オ



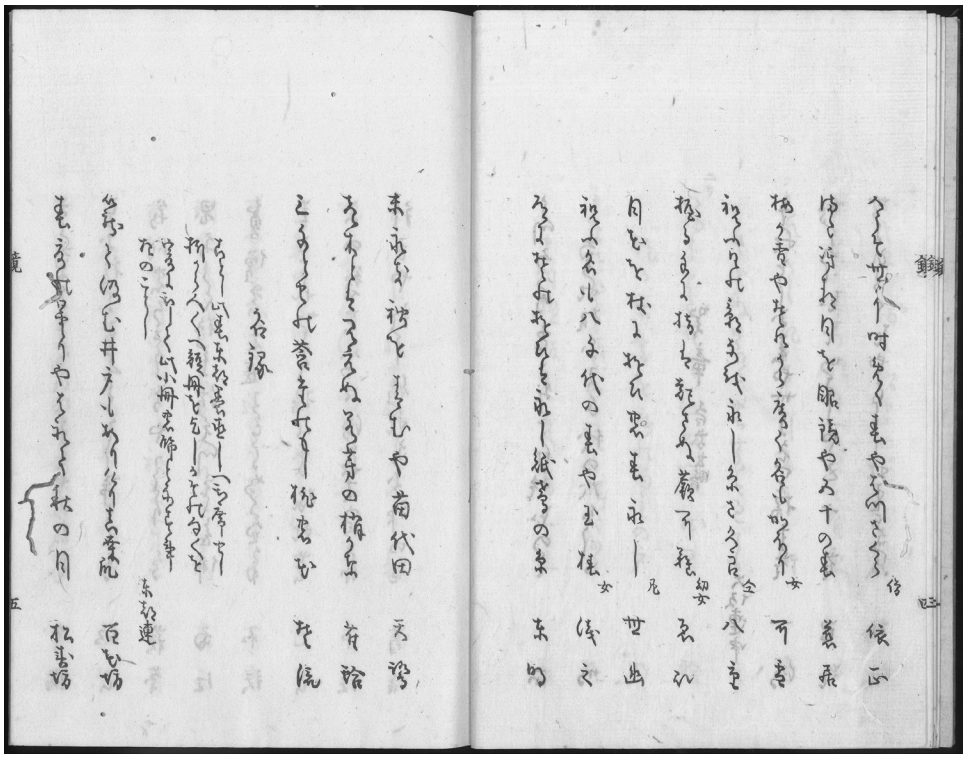
4.「二」ウ・「三」オ



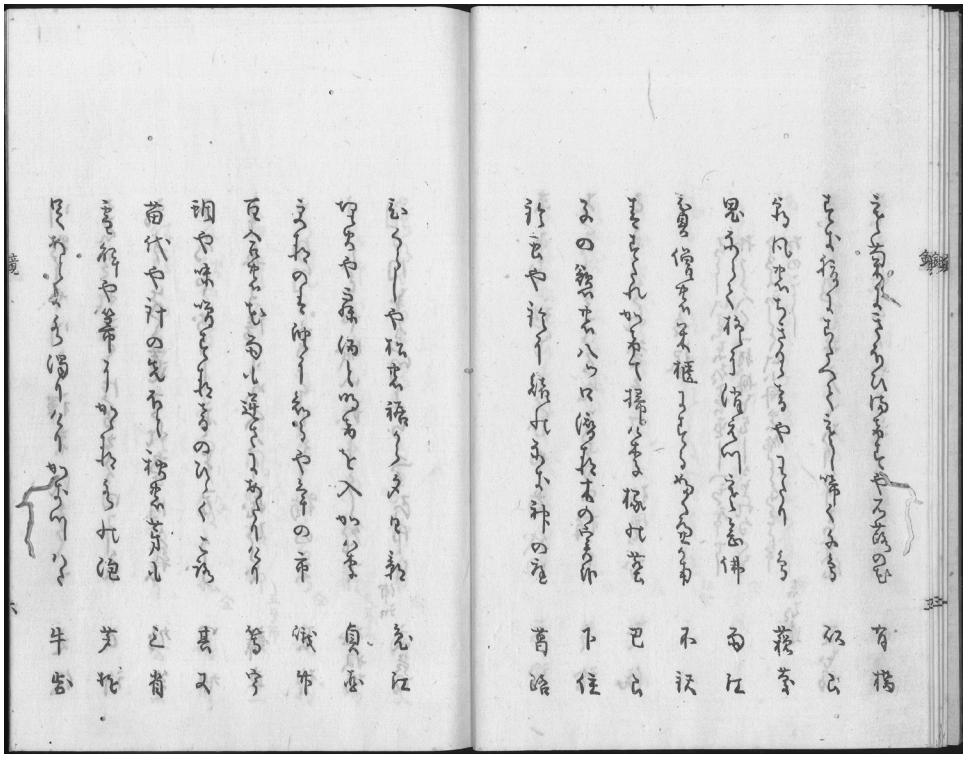
5.「三」ウ・「四」オ



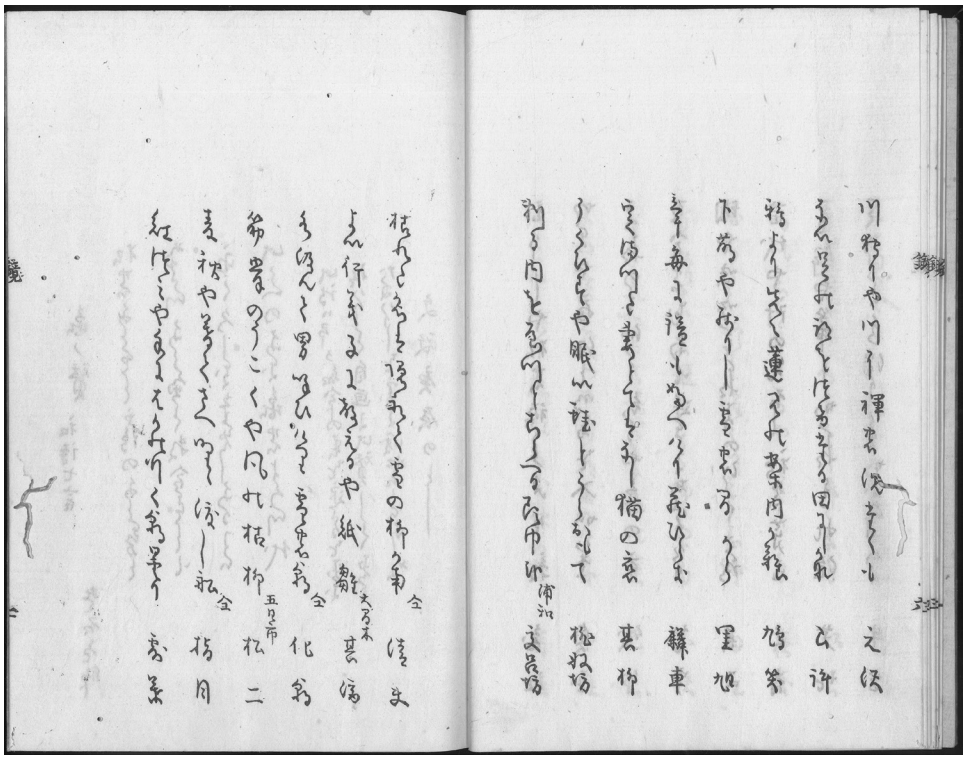
6.「四」ウ・「五」オ



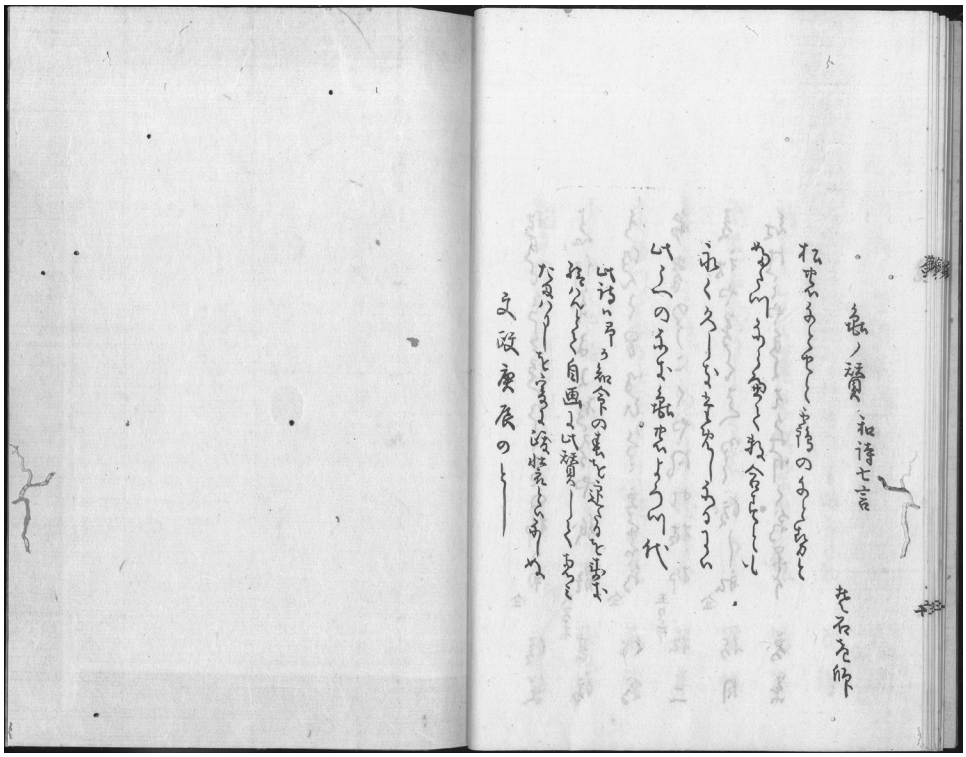
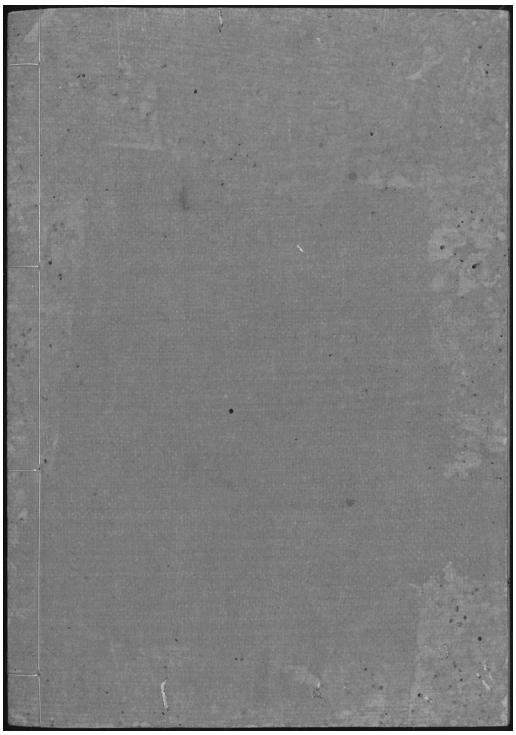
7.「五」ウ・「六」オ



8.「六」ウ・「七」オ



9.「七」ウ・裏表紙見返し



10. 裏表紙